

O\_023

## EAにおけるビジネスプロセスモデル利用方式の提案

## A proposal for using business process model for EA

片岡 信弘†  
Nobuhiro KATAOKA大澤 貴彦‡  
Takahiko OOSAWA

## 1. まえがき

近年大企業や政府機関などの巨大な組織(enterprise)の業務手順や情報システムの標準化、組織の最適化を進め、効率の良い組織運営を図るための方法論として、EAと言う考え方が盛んに取り上げられている。このEAは全体をトップダウンに整理し、新規のシステム構築やBPRとそれに基づく既存のシステムの作り変えに対して大きな指針を与えるものとされている。

然しこのEAの体系の中では、ビジネスプロセスをどの様に扱うのが明確でない。この論文ではここに焦点を当てて、EA体系の中でビジネスプロセスモデルの取り扱い方を提案するものである。

## 2. EAの問題点と解決策の方向付け

現在のEAは図1に示すように業務分析、業務パターンの認識を行なう「政策・業務体系」(Business Architecture)、業務システムで用いるデータの標準化を進める「データ体系」(Data Architecture)、組織全体で用いられる業務モデルと実際の個別の業務との差を埋め、相互接続性確立を行う「アプリケーション体系」(Application Architecture)および「技術体系」(Technology Architecture)の4つで構成されている。

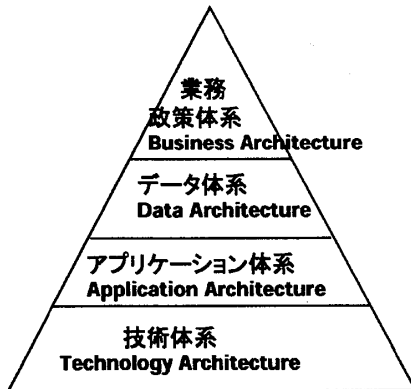


図1 EAの全体像

一方ビジネスプロセスマネジメントは、業務手順を明確としてその最適化、標準化、重複を無くす上で重要である。また、情報システムの立場からは、ソースコードの世界での保守ではなくその骨格を維持管理していくことによりソフトウェアの保守、管理の属人性を無くすと言う意味合いを持つことになる。

いずれも基本的に狙うところは、同じでありEAのアーキテクチャの中でビジネスプロセスマネジメントがどの

そこで次の3つのレベルからの整理を行う。

- (1) 経営レベル  
経営者が把握する。レベル  
組織全体を把握する大まかなモデル
- (2) 管理レベル  
各部門のマネージが把握する  
部門のマネージャが部門の管理のために必要なアクションが取れるモデル
- (3) システム開発レベル  
実務レベルの詳細なモデルであり、そのままシステム開発につながるモデル。

## 3. 提案内容

上記の方向付けに対して行った具体的な提案を以下に示す。

- (1) 経営レベル  
経営レベルでは、まさに、トップの業務体系が課題となるレベルであり、EAでの一番先頭の部分に相当する。

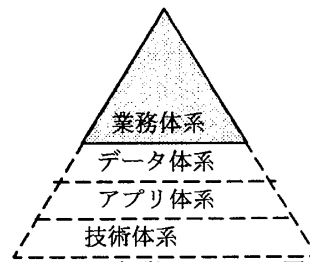


図2 経営レベルEA図

これは、ビジネスプロセス図では、次の様な関係を明確し最適なものにすることを指すものである。

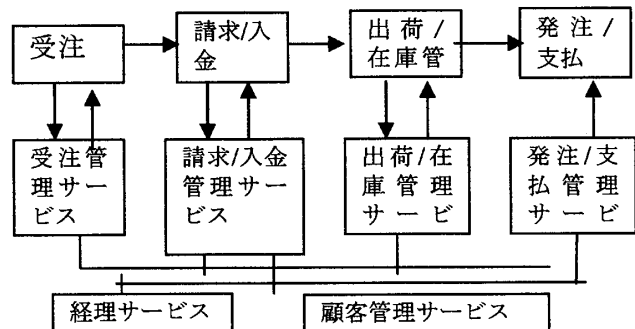


図3 販売会社ビジネスプロセス

すなわちどの様なサービスがどの様な順番で繋がっているかを組織全体で示すものがこのレベルのビジネスプロセスモデルと言える。これにより重複したサービスが存在しないか、或いはこの順番でのサービスで良いのかを高所大所からチェックが可能となる。またこの時点で、共通サービス(今回の事例で言えば、顧客管理、経理処理)などを洗い

† 東海大学 情報理工学部

‡ (株) CIJ

出しメインのビジネスプロセスモデルから独立しているかどうかなどである。

また、各サービスでどのようなデータを利用しているかの大局的な把握も必要となる。これによりデータの重複が存在しないことの確認ができる。EAでのデータ体系の一部が関係してくる。ここで各サービスをどの部門が提供しているかを合わせて記述を行う。

これらは、いずれも現行のものを記述した上であるべき姿を記述することによりBPRがなされる。

(2) 管理レベル(マネジメントレベル)

このレベルでは、部門の管理者がその部門の業務を行なっていくための部門を統括できるレベルのものが必要である。これは、EA図で記載すると図4に示す様にその部門で扱うデータのどのような項目が存在するかのレベルのデータ体系を記述する必要がある。

ただしこれは、経営レベルにおいて、すでに各部門の重複のチェックがすすんでおりその中でデータの項目設定を行うこととなる。

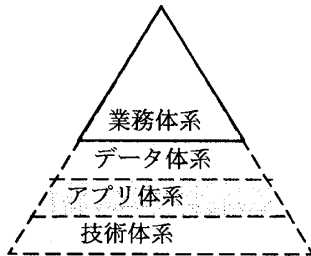


図4 管理レベル

ビジネスプロセスモデルでは、この段階のものでは図3の各サービスの現行プロセスの記述とこれに元づくBPR後の最適なプロセスの記述を行う。また、サービスを実現しているのは、アプリケーション体系であるから、図4のアプリ体系に対応すると言える。

(3) システム開発レベル

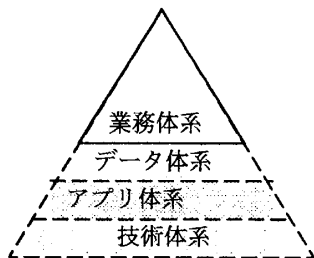


図5 開発レベル

このレベルでは、二つの意味を持つ。一つは、担当者が行う詳細なビジネスプロセスモデルであり、もう一つはシステムを実際に構築するためのビジネスプロセスモデルである。EAでは、データ体系、アプリ体系とともに技術体系が大きく関係してくる。ビジネスプロセスとシステムのギャップを埋めることが最大の課題となる。そのためには、下記の手順が必要となる。

- データ属性の詳細の設定よりDBの設計
- 管理者レベルの複数のビジネスプロセスモデルを実装したい単位にまとめる。
- システム化する部分を抜き出す

このビジネスプロセスモデルに対しても現行のものの記述とそれに対して変更する新しいモデルの作成を行う。

4. 具体的事例

以上の手順に従ってシステムの設計をおこなったのでその事例を示す。

(1) 利用したBPMはIDS シェヤー社の ARIS である。

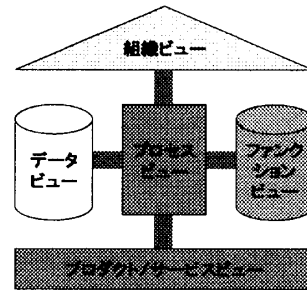


図6 ARIS ハウス

ARIS これは下記に示すような特徴を持つ。

組織ビュー、データビュー、ファンクションビュー、プロダクト/サービスビューの4つを繋ぐものがプロセスビューとして定義しており組織、データの考えがビジネスプロセスの中に明確に定義されている。

(2)設計事例

図3の販売会社ビジネスプロセスに基づき設計をしたものを図7に示す。

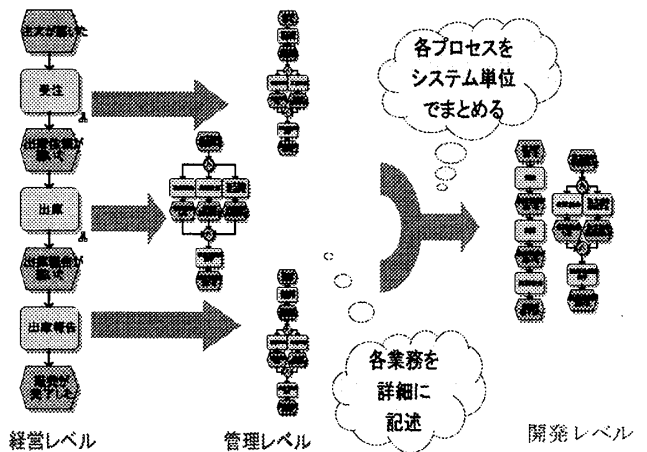


図7 ビジネスプロセスモデル作成の一連の流れ

5. 結論

特定の業務でビジネスプロセスを元に業務システムを構築することは、容易であると考えられる。然し大規模な組織において、ビジネスプロセスどのようにレベル付けし作成するかと言う指針を与えるということに対して、EAの価値は存在すると考える。

参考文献:

- [1]エンタプライズ・アーキテクチャの基本と仕組み 秀和システム
- [2]連携するシステムを構築するための開発方式の提案 SWIM2005-22 大澤貴彦 片岡信弘